

19世紀末に咲いた炎の恋 哀しいまでに美しい一人の女の運命を描いた 珠玉の文芸ロマン。

道徳の鎖を断ち切って、彼女は地の果てまでも愛を追い続けた。

罪物語

DZIEJE GRZECHU

愛するは罪――しかし、 なぜ、ひたすら愛することが罪となり それゆえに、この世から 制裁を受けねばならないのだろう。

『アデルの恋の物語』で恋の狂気に落ちて男を追うアデル、『テス』で恋の成就の瞬間、撃たれて果てるテス、『フランス軍中尉の女』で娼婦の烙印と恋泥棒の汚名を着たサラ……彼女たちは皆、いちずな愛を男に捧げたがために、狂気や死で人生を閉ざした。しかし、人びとは決して、そんな女を許そうとはしなかった。

この映画のヒロイン、エヴァはそうした女たちの中でも とくに、過酷な人生を生きた。彼女ただ一人の男を愛し たがために、男たちに弄ばれ、娼婦となり、生み落した ばかりの嬰児を捨て、人をあざむき、殺人者たちの手先 となった。そのどれ一つをとっても、十分に、波乱に富 んだ女の物語ができ上るほどだ。

一人の女を押し流してゆく数々の運命。女ゆえの愛。 ヴァレリアン・ボロフチク監督は、まったく思いきった 大胆な手法で、エヴァと男たちとの交情を描き出す。 たわむれの愛、真実の愛、力づくの愛、娼婦としての技

たわむれの愛、真実の愛、力づくの愛、娼婦としての技 巧的な愛……それらはまるでひそかにのぞき見でもす るように、時には淫らに、時には美しく展開していく。

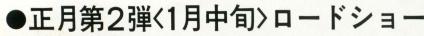
しかし、エヴァは、一人の男の腕に辿り着くためだけに、 人生の長い道のりを生き続けた。地の果てまでも、自分 がどんなに傷ついたとしても、どんなに罪を犯したとし ても………。

ワルシャワ、ウィーン、パリ、ローマ、モンテカルロ… と、美しい世紀末の都市にも目もくれず、たった一人の 男を熱愛し、純粋な魂を持ち続け、生きぬく女――エヴァ 彼女には、もはや、**愛だけしかみえない**。









前売券発売中!1100円 (一般1400円/学生1200円の処)

#新存典ボール・1 (351) 新存典ボール・1 3022